

日本語文読解プロセスにおける辞書の使用 (漢字圏学習者の場合)

鵜沢 梢

レスブリッジ大学

Abstract:

This case study explores Chinese native speakers' use of dictionaries in the process of reading Japanese text. Three Chinese students who were studying intermediate-level Japanese at a university in Canada participated in this study. Contrary to general assumptions that Chinese native speakers could read Japanese text relatively easy due to their kanji knowledge, detailed analyses from the participants' think-aloud protocols, interviews, and observation notes revealed that they had problems in understanding Japanese text even though they used two kinds of dictionaries (Japanese-English and kanji dictionaries). Japanese sentences are written without space between words and many Japanese words consist of kanji and hiragana. Because the participants' knowledge in Japanese vocabulary and syntax was still limited, they often cut words and phrases written in hiragana inappropriately. This hindered their checking words in the dictionary. Comparing the present participants to the English native speakers (advanced-level Japanese-language learners) in Uzawa's study (2000), the Chinese students' knowledge of kanji was not an advantage for understanding Japanese text. Knowledge of Japanese syntax, vocabulary, and kanji in Japanese pronunciation is the key for using dictionaries efficiently for reading Japanese text.

1. はじめに

言語教育における辞書使用についての研究はこれまでほとんどされてこなかったという (Summers 1988)。語彙の習得におけるストラテジーのひとつとして Gu & Johnson (1996), Kojic-Sabo & Lightbown (1999), Sanaoui (1995) 等によって最近取り上げられてきたにすぎない。日本語教育の分野においても辞書の使用に関する研究は筆者の知るかぎりでは鵜沢 (2000) があるのみである。従来の日本語文読解の研究では被験者に辞書を使わずテストのような設定で文を読ませ、そのあと理解度をテストしたり文の内容をどれだけ記憶できたかを調べて被験者の読解力とストラテジー使用 (ボトムアップかトップダウンか) との関係を調べる研究が多かった (例えば 南之園 1997, 森 2000, Everson & Kuriya 1998, Horiba 1990)。

鵜沢 (2000) は北米で漢字を外国語として勉強している英語母語話者 (上級日本語学

習者) がどのように漢字の読み方を覚えているのか、どのように辞書を使って文を読んでいくかを観察し研究したものである。しかしこの研究はケーススタディーでもあり、被験者が2名なのでもう少しデータを積み重ねていく必要がある。そこで本研究では、同じく北米で中級日本語を勉強していた3人の学生(漢字圏学習者)に被験者になってもらい、日本語読解プロセスにおける辞書の使用について調べてみることにした。本研究もケーススタディーであるが、鶴沢(2000)における2人の非漢字圏学習者のデータと比べてみることにより、日本語学習者の辞書の使い方の問題点等が浮き彫りにされてくるのではないかと考える。

漢字の分からない英語圏の日本語学習者に比べ、中国人学生のように母国語として漢字の分かる日本語学習者は日本語文を読むのはかなり簡単であると一般的には思われている。日本語の語彙は漢字を含むものが大半を占めているので漢字の意味さえ分かれば書いてある文章の意味は大体わかると考えられる。しかしながら、Matsunaga(1999)は、漢字を日本語の発音で読めなければ、漢字圏、非漢字圏学習者にかかわらず日本語の読解力は伸びないと結論している。またMori(1999)の研究でも漢字の一字一字の意味のみにたよるストラテジーでは日本語文は読みこなせないとしている。

そうは言っても、日本語文を読むには、漢字の知識が不可欠である。もし中国人学習者のように漢字の意味が分かれば、中級程度の日本語を勉強したら日本語文をかなり読みこなせるようになっていないか。外国語として日本語および漢字を上級レベルまで勉強した英語圏学習者と同じか、もしくはそれ以上に日本語文読解力はあるのではないか。中国人学生だったら漢字辞書の使い方にも慣れているはずである。それで鶴沢(2000)における上級日本語学習者(非漢字圏)の日本語読解プロセスにおける辞書の使い方を参考にしつつ、中級日本語学習者(漢字圏)の日本語文読解プロセスにおける辞書の使用を調べてみたのが本研究である。

2. 研究目的

本研究における研究目的を次のように設定した。

- (1) 漢字圏学習者は日本語文を読むとき、どのように辞書を使うのか。
- (2) 非漢字圏学習者と比べて日本語文を読むのは本当に易しいのか。
- (3) 辞書を使うとき、何が問題となるのか。

3. データ収集

3.1. 被験者

日本語学習者の辞書の使い方および読解プロセスを細かく調べるのが目的であり、ケーススタディーでもあるので被験者は3名にした。3名とも漢字を母国語として読んだり書いたりできる中国系の20歳代前半の学生で、この研究の被験者になってもらった時点(2001)では、カナダ西部にある大学で勉強していた。専門は3名とも国際経営である。大学では初級、中級の日本語を勉強したが、3名とも日本に行ったことはないので日本語の会話力は低い。そして日本語の習得度にはばらつきがあり、1人の学生の日本語文読解力はとても低い。

(3名の被験者の背景)

(1) アン(仮名) マレーシア出身。カナダに来る前にマレーシアで簡単な日本語を勉強した。マレーシアのカレッジで1年半勉強してからカナダの大学にトランスファーした。カナダ在住1年半だが、英語が流暢である。3名の中では日本語の読解力が一番優れていた。

(2) マリア(仮名) シンガポール出身。カナダ在住2年。シンガポールのカレッジで3年間勉強してからカナダの大学にトランスファーした。幼稚園、小学校時代から英語で授業を受けていたので英語が母国語のように上手だが漢字力がほかの2名に比べるとやや劣る。

(3) ケビン(仮名) ホンコン出身。カナダ在住4年。本人は漢字が分かるので日本語を読むのは簡単だと言っていたが、3名の中では日本語文読解力が一番弱かった。

データ収集には個人個人筆者の研究室に来てもらい **think-aloud** をしながらパラグラフ2つの短い文章(鶴沢 2000 で使われたもの)を読んでもらった。インタビュー、観察記録、**think-aloud** を書き起こしたものをデータ分析に使った。ケーススタディーなのでプロセスを細かく観察しており、統計分析は行っていない。

3.2. Think-Aloud

この研究は被験者が3名だが、Think-Aloud という手法を用いて、学習者の読解プロセスをかなり細かく分析した。Think-Aloud というのは被験者が文章を読んだり、書いたり、何か問題を解くとき、何を考えているかを知るために頭に浮かんだことを何でも

口に出して言ってもらおう手法で北米では教育学、心理学などの分野でデータ収集によく用いられてきた (Ericsson & Simon, 1984)。日本語学習者についての研究でも、外国語としての日本語での作文のストラテジー (Uzawa & Cumming 1989) 等で Think-Aloud が使われてきており、被験者の意識的なストラテジー使用を解明するのに役に立ってきた。普通、Think-Aloud の発話はテープにとり、書き起こし、研究のテーマにそって分析する。しかし Think-Aloud データのみではたいていの場合不十分であるので、今回の研究でも Think-Aloud データの他にインタビューと観察記録も合わせて分析材料とした。

3名の被験者とは個々に時間を決めて筆者の研究室に来てもらった。インタビュー、読解時の Think-Aloud、観察記録などのデータ収集に約2時間を予定したが、いずれも2時間以内に終了した。

最初に来てもらった被験者はアンで、まず彼女の英語と日本語の学習歴を聞き、大学での専門、将来のことなどを聞いて、リラックスしてもらった。それから、Think-Aloud について説明した。また Think-Aloud 中の使用言語は普通母国語のほうが好まれるのだが、私が中国語が分からないため、英語でお願いした。次にマリアに来てもらったのだが彼女の場合も同じように英語および日本語の学習歴、大学での専門、将来の希望などを聞いてから、Think-Aloud に移行した。マリアの使用言語も英語であった。一番最後にケビンに来てもらい、前2者同様、短いインタビューと Think-Aloud の説明の後、読解に移った。ケビンの使用言語も英語である。

なお、文章を読むとき、黙読するのが普通であるが、このケーススタディーでは読むプロセスを研究するのが目的なので、文章は声に出して読んでもらった。いずれの場合も、私は被験者の隣に座り、耳で彼らの言うことを聞きつつ、目では読解用の文章を追ってどこでどんなことを言ったか、何をしたかを記録していった。後日、テープに採った発話を書き起こし、観察記録と照合して分析していった。

3.3. 読解に使われた文章

読解用の文章は鶴沢 (2000) と同じものにした。鶴沢 (2000) において2名の被験者がとてもすらすらと読むことができた簡単な文章であり、難しくて黙り込んでしまうこともなく、読みながらいろいろなことを声に出して言っていたので、本研究の被験者にも適当であると考えた。また鶴沢 (2000) と比較するためにも適当であると判断した。使用したものは三浦・マグロインの『中級の日本語』(The Japan Times 刊)にある速読

用の文章で「トイレのドア」というパラグラフ2つの短い文章である。全文は下記のとおりで、家中の「じゅう」とお風呂場の「ば」にかながふってある以外、漢字にふりがなはついていない。もちろんこれは被験者3名とも初めて目にする文章である。

「トイレのドア」

ジェイソンが日本に着いた日のことだった。ホストファミリーの家に着いたのは、日曜日の午後四時ごろだった。ホームステイの家には夫婦のほかに、高校生のむすこと中学生の娘がいて、全部で四人の家族である。この家族は金持ちらしく、最近建てた新しい家に住んでいる。なかなかモダンな家で、日本間は一部屋しかなく、あとは全部洋間である。ジェイソンがその家に着くと、まずお母さんが家中を見せてくれて、「ここがあなたの部屋よ」とか「お風呂場はここよ」とか「トイレはここ」と教えてくれた。お風呂は日本式で、トイレは洋式だと分かった。

夕食前に、ジェイソンはトイレへ行っておこうと思って、トイレの前まで行くと、ドアがしまっているのので、自分の部屋へ戻り、二、三分待ってからまた行ってみた。ところが、まだ誰か入っているらしくドアはしまったままだ。仕方なく、またしばらく自分の部屋で待ってから、もう一度行ってみたが、まだしまっている。ジェイソンは困ってしまった。その時、お母さんが「ご飯ですよ」と呼ぶ声をした。食堂へ行くと、もう家族全員いすに座ってジェイソンを待っていた。トイレに入っていたのは誰だろうか。

4. 結果

結果を要約すると次のようになる。まず、アンとマリアはいずれも漢字の意味は分かっているけれども日本語の発音がわからないことが多いので、漢字辞書は主に発音を知るために使っていた。また日本語のコンテキストの中での漢字の意味を確かめるためにも使っていた。しかしながらケ빈は漢字辞書は使わず和英辞書のみ使い、ひらがな単語とカタカナ単語のみ調べていた。しかし日本語文は単語と単語の間にスペースがなく、また単語は漢字とひらがなで書かれているものが多い。ケ빈は語彙力不足から「またしばらく」を「またし」と「ばらく」に区切って辞書で調べるといように、ひらがなの語句を変なところで区切って辞書をひくため、またさらに文法の構造をよく理解していないため、辞書を使っても文章を理解することはできなかった。ひらがなで書かれた語句を変なところで切って和英辞書で調べるという傾向はアンやマリアにも見られた。アン

が使用した辞書はコンピュータにダウンロードした NJStar という日本語学習者用の辞書の中に入っている漢字辞書と日本人の友達に借りてきたという三省堂のデイリーコンサイス和英辞典、マリアは NJStar の漢字辞書および和英辞書、ケ빈は買ったばかりのランダムハウス和英辞書を使っていた。なお NJStar (njstar.com) というのはフリーでダウンロードできる日本語学習者用の辞書で漢字辞書と和英辞書が使える、特に漢字辞書は調べたい漢字の入った熟語の発音と意味が簡単に画面ですぐ見られるようになっている。(例えば、「金」という漢字を調べると金持ち、金曜日、成り金などの熟語が、発音や使っている場所に係りなく同一画面で見ることができる。) 以下は3名の学生各々の読解プロセスにおける辞書の使用に関する発話データの例である。同じような例が重なるので代表的なものを選んで載せ、観察記録を基にした筆者のコメントを () につけた。3人の発話は「 」に入れた。

4.1. アン読解プロセスにおける辞書使用例

アンはまず最初に発音のよく分からない漢字単語を調べながら文を声に出して読んでいき、次にまた最初に戻り、今度は意味をとりながらひらがなやカタカナの単語を調べながら読んでいった。次の発話例は文を声に出して読んでもらっている途中で辞書を引くために止まって発話したものうち代表的なものを選んで発話順に載せたものである。アンは漢字の発音は NJStar の漢字辞書を使って調べ、ひらがなの単語は友達にこの日の為に借りてきたという三省堂のデイリーコンサイス和英辞書を使って調べていた。

< 1 回目の読み >

「I have to find out this」(「夫婦」で止まり NJStar の漢字辞書で発音を調べる) 「OK, I got it...ふうふ」(意味は分かっているのかと聞いたら「yes」と答えた)

「I don't know this」(「娘」で止まり発音を辞書で調べる) 「むすめ」

「I can't...I don't know this. I am checking the last kanji」(「風呂場」で止まり辞書をひく)

「にほんし、、、」(「式」の発音が分からず、まず NJStar の漢字辞書で発音を調べ、次に三省堂のデイリーコンサイス和英辞典で「式」の意味をチェックしたが適切な意味が見付からない。しかし「洋式」は読めないが western style という意味だと分かっていたので、それから類推して「日本式」の意味が分かった。なお、「式」で辞書をひくと

ceremony, equation 等の意味が出てきて suffix として使われる「～式」は 出てこない。)

「ふんかった」(「分かった」を「ふんかった」と読むが、すぐおかしいと気が付き「わかった?」と筆者に聞きただす。)

「Oh, who...」(「誰」でとまる。意味は分かったが発音が分からなかったので 辞書 で調べる) 「Oh, だれ」

「I don't know this...」(「仕方」で止まり NJStar を使って発音を調べる) 「しかた」

「...make it sure...」(「困って」の意味は分かったが発音が確かではなかったので 辞書 で調べる) 「yes, it is. こまる」(発音は合っていた。)

「oh, I have to find it out」(「座って」で止まり辞書をひく。そして「座る」は「坐る」と同じだと分かって納得する。)

< 2 回目の読み >

「この意味は何ですか」(「ホストファミリー」の意味を聞いてくる。)

「むすこ」(コンサイスで意味を調べる) 「son」

「むすめ is daughter..., in Chinese, "wife"」(「娘」という漢字の意味の 違いについて コメントする)

「なかなか」(コンサイスで調べる) 「very」

「モダン、...modern?」(「モダン」の意味を推量する)

「じぶん means oneself?」(「自分」の意味を当てる)

「仕方なく」(「なく」の意味をコンサイスで調べるが出ていない。「仕方」の発音は前回 NJStar で調べておいたが、その時調べた「しかた」の意味はコンテキストに合わない。筆者が「仕方なく」は one word だと言うと辞書をひき「unwillingly」という意味だと分かる。)

「I am checking the whole word」 (「またしばらく」を one word として調べている)

「I thought it's cafeteria」 (アンが大学の日本語コースで使用していた教科書 (Tsukuba Language Group: Situational Functional Japanese) には「食堂」は カファテリアの意味で出てくるのでカファテリアの意味にとってしまう)。

アンの場合、45 分間で読み上げ、英語でストーリーを言ってもらったが第1段落は正確に読み取っていた。第2段落は細かい点で所々不正確なところがあったが大体正確に読み取っていた。日本のトイレのドアの習慣については分かっている、「who was in the toilet?」と聞いたら「no one was there」と答えた。マレーシアでもトイレのドアはいつも閉めておく家が多いということであった。

4.2. マリアの読解プロセスにおける辞書の使用例

マリアの場合、1 回目は意味の分からない単語に下線を引きながら音読していったがカタカナの単語は読めず筆者にたびたび聞いてきた。また漢字混じりの単語は間違った発音で読むことが多く、1 回目の音読には 15 分かかった。2 回目は下線を引いた単語の意味や発音を辞書 (NJStar の漢字辞書と和英辞書) で調べながら読んでいった。しかし 2 回目の読みでも意味がとれず 3 回目の読みが必要であった。ちなみにマリアが下線を引いた単語は 38 あったが、それ以外にも分からなかった単語はたくさんあった。発話は同じような例が繰り返されるので代表的なものを下記に載せる。

< 1 回目の読み >

「日本にきいたにちのことだった、、、」 (「着いた」を「きいた」、「日」を「にち」と発音している)

「I don't know this....in Japanese」 (「高校生」の読み方がわからない)

「I don't know what to read.... ～がいて」 (「娘」という漢字をとばして読む)

「にほんかんは...I don't know what to read this....しかなく」 (「日本間」を「にほんかん」と読み、「一部屋」の読みが分からずとばして読む)

「something のまえで」 (「トイレ」が読めない)

「something の部屋でもってから」 (「自分」が読めず something と言い、「待つて」を「持つて」と勘違いする)

< 2 回目の読み >

「I check the dictionary for all those words. I know meaning, just pronunciation」 (NJStar の漢字辞書の部首索引を使って「高校生」の「高」を「十」で調べ、「高校生」という単語を引きだして発音をチェック)

「ようかん」 (「洋間」を「ようかん」と発音するが部首索引で「羊」から「洋」を出し、「洋間」の単語を見付ける) 「ようま」 (今度は正しい読み方をする)

「go through other compounds」 (「日本式」の「式」が読めないので発音を調べるのだが、辞書に載っている意味は equation, formula, ceremony でコンテキストに合わない。それで式という字の入った熟語を調べ、Japanese style という意味を得る)

「I'm not sure about the pronunciation, so I usually ask my Japanese friends.」 (漢字の発音は普段は友達に聞いていて、辞書は今回の研究の被験者になったために初めて使ったとのことである)

「in Mandarin, "who"」 (発音を辞書でチェックする) 「だれ」

「way, method, means」 (「仕方なく」の「仕方」を辞書で調べる)

「そのじ」 (「その時」を「そのじ」と読むが、おかしいと思い、発音を部首索引の「寸」で調べる) 「とき、time, hour, occasion」

「in Chinese, it means "rice"... I'm guessing ごはん」 (「ご飯」を「ごはん」と発音して NJStar の和英辞書で発音と意味のチェックをする) 「meal, cooked rice」 (正しい意味も得る)

「is this こえ？」 (和英辞書に「こえ」とタイプして発音をチェックする) 「yes」

「しょくどう？ but I'm not sure, so I check」 (「食堂」の発音をチェック) 「yes, dining hall, cafeteria」

「I'm not sure whether it is ぜん or せん」(「全員」の「全」の発音が確かでないので 筆者に聞いてくる)

「this is, I think, it is "to sit", but I don't know the pronunciation」(「座って」の発音を 総画で調べる)

< 3 回目の読み >

「I'll read it again to understand」(黙読しようとするが、さらにいくつか読めない 単語や意味の分からない単語に出会ってしまう)

「きいた... I missed this... check again」(「着いた」の発音が間違っていること に気が付き「着」を総画で調べる) 「つく to arrive at」

「Is this ひ? like day?」(「日」を最初「にち」と読んでいたが間違いに気が付く)

「高校生のむすこと...can I check this?」(「むすこと」を1語と 考えて和英辞書に 打ち込むが意味が出てこない。) 「I don't know what むすこと means.....I know こと」(ここでは「むす」と「こと」に分けて調べる) 「when it is hiragana, I don't know where to cut」(筆者がこれは「むすこ」と「と」であると説明する)

「I'm not sure this しかなく mean」(「一部屋しかなく」の「しかなく」を1語 と考えて和英辞書で調べるが出ていないので今度は「しか」で調べ、nothing but の意味を取る)

「分かった ...I'm trying to guess from the context...it means 'to separate', but I'm not sure...OK, check the kanji dictionary」(「分かる」と「分ける」を混同して いたが 辞書で両方の 単語を見付ける。「分かる」の意味が to understand だと分かって今までの理解が間違っていたことに気が付き、また最初から読み直す) 「I have to read the sentence again」

マリアの場合、全部読み終わるのに1時間 20 分かかった。全部読み終わった後で内容の理解についてチェックしてみたが第1段落はよく理解できていたが第2段落はよく分かっていないところが多かった。トイレのドアについての日本の習慣も分からないように「who is in the toilet? だれがトイレに入っているんだと思いますか」と聞いたところ「He couldn't open the door, so someone is in the toilet.... maybe a grandparent?」という答えが

返ってきた。シンガポールではカナダと同様、トイレに誰も入っていない時はドアを開けておくそうである。

4.3. ケビンの読解プロセスにおける辞書の使用例

ケビンの場合、買ったばかりだというランダムハウス和英辞書のみ使い、漢字辞書は使わなかった。いつも日本語文を家で読むときは、読めない漢字の発音は日本人の友達に聞いているとのことである。それでアンやマリアのように音読ができず、文章を黙読した後、意味を英語に翻訳しながら読んでいった。しかし2時間かかっても文章全体の意味はとれなかった。

「I have to scan....tend to be silent」

「I've just guessed the meaning of these katakana」

「this paragraph is about family....I can't translate the first 2 lines.... ごご4じ...it is on Sunday about 4 pm」

「ぜんぶで4にん....4 members of the family」

「they recently built a new home」

「I don't know this katakana」 （「モダン」が読めない）

「あとはぜんぶ....western style?」 （「洋間」の意味を推量する）

「I learned this, but forgot」 （「見せてくれる」の「くれる」を「くねる」で調べている）

「she said 'this is your room' then 'this is a bathroom, something like that, this is a toilet」

「this is 'teach', but 'kuneta' is attached」 （「教えてくれた」の「教えて」の意味は分かるが、「くれた」を「くねた」と発音し意味が分からないでいる）

「the bathroom is Japanese style and the toilet is western style」

「ちらしく」 （「金持ちらしく」の「ちらしく」を辞書で調べるが出ていないので似た

ような単語「ちらす」を持ってくる) 「scatter」

「しかなく」(「一部屋しかなく」のうち「しかなく」を辞書で調べるが見付からないので似たような発音の単語を読み上げる) 「I'm confused...しかる、しかねる」

「おこう....now I check the dictionary... おこる」(「行っておこう」の「おこう」を「おこる」にして辞書で調べようとするので、筆者が「おこう」は「おきましょう」と同じ意味だと説明する)

「ところが....I know I learned this....trying to guess the meaning by myself....address, place...I choose 'but」(「ところが」を「ところ」と「が」に区切って辞書で調べる)

「またし」(「またしばらく」を「またし」と「しばらく」に切って辞書で調べているので「また」「しばらく」で調べるように教える) 「I don't know how to cut it, this is one of the problems」

「みた....to see」(「行ってみた」の「みた」を to see と解釈する)

「また and まだ? I know both of them, but I don't know the difference」(「まだ」を「また」と勘違いしている)

「Jason is stuck in somewhere, he cannot get out, that's what I guessed....the door is locked, he cannot go anywhere...」

「in the dining room, all the family sit waiting for Jason」

「たの」(「入っていたのは」を「たの」で調べる)

「誰....I know this kanji, but I'll ask my roommate the pronunciation」

「what is だろうか?」(筆者に聞いてきたので「だれでしょうか」という意味だと教える)

2時間経っても文章の意味が分からなそうであったが、一応、内容についてどの程度理解できたか質問してみた。何が書いてあったか、意味が分かったか、という質問に対

して文章を英訳し始めたのでこの文章のポイントは何かと聞き、「who is in the toilet?」と聞くと、「a stranger?.....who is in the bathroom... I don't understand....whole sentence....I'm not sure」と答えた。

5. まとめ

本研究では下記の研究目的を明らかにすることができた。

- (1) 漢字圏学習者は日本語文を読むとき、どのように辞書を使うのか。
- (2) 非漢字圏学習者と比べて日本語文を読むのは本当に易しいのか。
- (3) 辞書を使うとき、何が問題となるのか。

まず(1)であるが、これは前述の **think-aloud** を書き起したものを読んでも分かる ように漢字の意味はわかっても日本語での発音が分からないことが多いので、アンとマリ アの場合は漢字辞書は発音をチェックするのに使っている場合が多かった。また日本語のコンテキストの中での漢字の意味を確かめるためにも使っていた。和英辞書はひらがな単語を調べるのに使われていたが、日本語の単語は漢字とひらがなが併用されているものが多いので、例えば「仕方なく」のような単語は、漢字の部分とひらがなの部分を別々の単語だと思い込み、「仕方」と「なく」に分けて調べるといようなケースが多く見られた。また、日本語文は単語と単語の間にスペースがないのでどこで切っていいかわからず変なところで切って辞書を引き、和英辞書を使っても語彙力や文法力がない学生は日本語文を理解することはできなかった。

(2) については、漢字圏からの日本語学習者の場合、漢字の意味が分かることが多いため、日本語文を読むのは簡単であると学生も教師も思いがちである。しかしながら今回のケーススタディーでは、漢字の意味が分かっているにもかかわらず文章を正確に理解できないことがわかった。文法の知識、語彙がある程度、身につけていないと辞書を使っても文章を理解することはできないのがはっきりした。鶴沢 (2000) の非漢字圏の上級日本語学習者の研究と比べるとこのことがはっきり分かる。

鶴沢 (2000) では仕事で日本に2年間住んでいたことがあるマイクという学生と日本に6週間行ったことがあるジムという学生が、本研究で使用したのと同じ文章を読んでいるのだが、マイクの場合は10分もかからずに正確に読み終わり、ジムの場合も20分で正確に文章を読み取っていた。両名とも日本語の会話力があり、マイクは特に流ちょうに日本語が話せる。マイクの場合は、読めない漢字が14個あったのだが、そばにい

た日本人のデータ採集者に漢字の読み方を聞いて漢字の発音が分かるとすぐ意味が分かり辞書は1度も使用しなかった。ジムの場合もほとんどの漢字は正確に読んでいたが読めない漢字、意味の分からない単語は NJStar の漢字辞書と和英辞書を自在に操りあまり時間をかけずに調べていた。ひらがなの語句を変なところで切ってしまったのは「ところが」の1回だけで、文章全体の意味が分からなくなるということではなかった。このように漢字を日本語のコンテキストの中で読む勉強をし、会話力もある非漢字圏の上級学習者のほうがずっと早く、正確に日本語文を読んでいて、辞書も読解プロセスにおいて役に立っていたし、語彙力、構文力が身につけていたので頻りに辞書を引かずに思考の流れを途切らせるということもなかった。

漢字圏の学習者がいくら漢字を知っていても日本語の構文、語彙、会話力が身につけていないと日本語文を読みこなすことはできないのである。ケビンのように日本語に使われる漢字は中国語と大体同じ意味だから漢字さえ分かれば日本語文は読めるはずだという学生の信念は変えさせないといけない。また漢字を日本語の発音で読めなければいくら漢字の意味を知っていても日本語の読解力は伸びていかないであろうことは今回のケーススタディーでも明らかであり、本研究は Matsunaga (1999) や Mori (1999) の 研究をサポートする結果になった。

(3) の辞書を使うときの問題点であるが、今回の研究において漢字圏学習者が辞書を使うとき問題となっていたのは、語彙力がないためひらがなの語句を変なところで切って辞書を引いていたことである。また漢字の日本語読みが分からず、発音を頻りに調べていたことも思考の流れを途切らせる原因になっていたかもしれない。

以上のことから、辞書の導入は学習者の語彙、構文力、会話力がある程度身につけてからでないと、学習者にかなりの負担をかけることになる。それで学習者に語彙リストを渡すのはいいことだと思うがすべてリストに載せるようなことはせず、載っていない単語、漢字は辞書を使って調べさせるようにして辞書の使い方にも徐々に慣れさせるようにしたらいいであろう。また、読解用のテキストに未知の単語が多すぎるといくら語彙リストを使っても読解の楽しみを奪ってしまう。Everson & Kuriya (1998) は 学習者の会話力に合った読解教材 を提案しているが 教師は読解 用のテキストの選択にも十分な考慮を払わなければならないだろう。なにも authentic なものだけをテキストに選ぶ必要はないし (Everson & Kuriya 1998)、ときには類推しながら読んでいけるくらい易しい文も読ませる必要もある (Nation & Coady 1988)。学習者が会話で覚えた語彙を漢字と

結び付けられるような読解教材を作ったり使ったりするのもいいだろう (Matsunaga 1999)。

それから今回のケーススタディーで分かったように、漢字圏の学習者の漢字の知識そのものは日本語文を読む時あまり役には立たないので、日本語の授業で漢字圏の学習者と非漢字圏の学習者を分ける必要はあまりなさそうである。日本語文を読むときに重要なのは漢字の知識より、語彙と構文力、それに漢字の日本語での発音である。

今回の研究も鶴沢 (2000) と同様、小規模のケーススタディーであるので、もう少しこのようなケーススタディーがいろいろな日本語学習者を対象にして行なわれるといいと思うが、このような研究がまとまれば、日本語学習者にとってどのような辞書が必要とされるのか、どのように辞書を授業の中に取り入れていったらいいのか等、授業の実践に役立つ答が出るのではないかと考える。

※本稿は2002年6月にトロントで開かれたカナダ日本語教育振興会年次大会における研究発表に大幅に手を入れ書き直したものである。ご質問、ご意見等をくださった方々に感謝したい。

参考文献

- 鶴沢梢 (2000) 「日本語読解プロセスにおける辞書の使用(非漢字圏学習者の場合)」 『山形大学日本語教育論集』 第4号 1-15.
- 三浦昭・マグロイン花岡直美 (1994) 『中級の日本語』 ジャパンタイムズ社
- 南之園博美 (1997) 「読解ストラテジーの使用と読解力との関係に関する調査研究—外国語としての日本語テキスト読解の場合」 『世界の日本語教育』 7号 31-44.
- 森雅子 (2000) 「母国語および外国語としての日本語テキストの読解—Think-aloud 法による3つのケーススタディ」 『世界の日本語教育』 10号 57-72.
- Ericsson, K. A. & Simon, H. A. (1984) *Protocol analysis: Verbal report as data*. Bradford, MA: MIT Press.
- Everson, M. E., & Kuriya, Y. (1998) An exploratory study into the reading strategies of learners of Japanese as a foreign language. *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 32, 1-21.
- Gu, Y. & Johnson, R. K. (1996) Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning*, 46, 643-679.
- Horiba, Y. (1990) Narrative comprehension processes: A study of native and non-native readers of Japanese. *Modern Language Journal*, 74, 188-202.

- Kojic-Sabo, I. & Lightbown, P. (1999) Students' approaches to vocabulary learning and their relationship to success. *Modern Language Journal*, 83, 176-192.
- Matsunaga, S. (1999) The role of kanji knowledge transfer in acquisition of Japanese as a foreign language. 『世界の日本語教育』 9号、87-100.
- Mori, Y. (1999) Beliefs about language learning and their relationship to the ability to integrate information from word parts and context in interpreting novel kanji words. *Modern Language Journal*, 83, 534-547.
- Nation, P. & Coady, J. (1988) Vocabulary and reading. In R. C. Carter & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary and Language Teaching* (pp.97-110). New York, NY: Longman.
- Sanaoui, R. (1995) Adult learners' approaches to learning vocabulary in second languages. *Modern Language Journal*, 79, 15-28.
- Summers, D. (1988). The role of dictionaries in language learning. In R. C. Carter & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary and Language Teaching* (pp.111-125). New York, NY: Longman.
- Tsukuba Language Group (1992). *Situational Functional Japanese*. Tokyo: Bonjinsha.
- Uzawa, K. & Cumming, A. (1989). Writing strategies in Japanese as a foreign language: Lowering or keeping up the standard. *Canadian Modern Language Review*, 46, 178-194.